



## 念願の台湾旅行 ―潮音寺とバシー海峡を訪ねる―



稲田覚さんが立案された台湾旅行に誘われて、高瀬高校同窓会京阪神支部の皆さんに同行して、桃園、台北、高雄、恒春周遊 5 日間（8 月 20 日出発、24 日帰着）の台湾旅行に参加した。

6 月の田植えで忙しくしていた時に、「慟哭の海峡 門田隆将著 角川文庫」を読んでおくようにと、稲田さんが貸してくれた。表紙の「慟哭」を見て、直ぐに新明解国語辞典（三省堂）を引いた。『「慟」は普通以上に悲しむ意。声を立てて泣き悲しむこと』とあった。10 万人以上の日本兵が輸送船でフィリピンへ送られる途中、アメリカの潜水艦の餌食となったあのバシー海峡のことだと分かった。この本を読むまでの私は、それ以上の知識はなかった。昼は野良仕事で疲れていても、晩ご飯が終わると読み始めた。数晩で一気に読み終えた。気が付いたら 2 回目を読み始めていた。「慟哭の海峡」はそんな本である。多くの皆さんに是非読むことをお勧めしたい本である。

さて、前置きが長くなった。1 日目、2 日目こそ、午前中は降らなかったが、午後は土砂降り、3 日目、4 日目、5 日目は一日中朝から夜中まで土砂降り。熱帯なのに寒くて困った。

この 5 日間の旅行を全て書くことは長くなり過ぎる。思案した末に、第 2 日目の桃園市立内壢国民中学校訪問と第 4 日目の恒春半島、バシー海峡観光を中心に、他は極々簡単に触れる程度とすることとした。

### 第 1 日目（8 月 20 日 木曜日）

予定通り、午後 3 時過ぎ桃園（台北の西 20 km）空港到着。観光バスへ乗り込む。日本では見たことのない構造。地面から 6 段の階段を上がる。客席の床の位置がとても高く、私が少し手を伸ばせば天井に届く。窓際の席は、私がそのまま立てば網柵に届いてしまう。しかし、外の景色を見るにはとても都合が良い。ガイドは黄さん。台湾では 17 人に 1 人が黄さん。3 番目に多い姓だそう。実に愉快な方だった。耳の遠い私でも、補聴器を付ければほぼ聞き取れた。有難かった。自己紹介の後、「皆さんのこと、習近

平には言っております。返事は無かったです。台湾の今日あるのは日本のお陰です。鉄道を付けてくれました。最近では高速鉄道（日本では新幹線という）をつけてくれました。だから蜂が飛んできてても日本人は刺されません。中国人は刺されます。・・・」旅行中ずっとこんな調子で話された。耳の遠い私でも聞くのが楽しみな程だった。

桃園神社参拝後ホテルへ。

## 第2日目（8月31日 金曜日）

8時半から、桃園市立内壠国民中学校訪問。1961年創立、生徒数1450人。三野津中学校と交流している。三野津中学校の引率の先生3名、生徒13名とお会いした。玄関に入って（正面の壁面を見て）驚愕。大きな書籍100冊位か（数えていないので見当が付かない）、その写真が壁面全体を埋めている。生徒達は登校して校舎へ入ったら、この壁面を最初に見ているのだろうか。日本には、こんな構造の学校は無いらう、と圧倒された。校長室へ案内されてまたびっくり。広い。色々と飾ってある。それでいて落ち着いた雰囲気が良い。日本にはこんな校長室はないだろう。校長先生は女性の方、鄭如玲さん。ジーパンに運動靴だ。壁面に、仏説摩訶般若波羅蜜多心經の大書きの墨書が飾ってある。鄭如玲の署名を見て、私は校長先生に、「美しい書に感動しました」と言ったら、「私は敬虔な仏教徒ですから」と言われたのだった。それから校内を案内していただいた。貫通廊下に、大谷翔平の大きな写真が掲げてあり、「超越極限的二刀流大谷翔平的梦想方程式」と説明書きがあった。これにまたびっくりした。日本で飾っている学校があるのだろうか。中庭を見れば、椰子の木が3階建ての校舎を越えそうである。黄さんに、「ヤシはあんなに高くなるんですね」と言ったら、「あれは実が付かない種類です。ヤシは84種類あります」と言われた。



「84種類もあるの？」と問い返そうと思ったが、「84<sup>ヤシ</sup>」だと気付いて「やられた」と「にやっ」と笑って止めたのだった。校長先生に、「般若心經、尊敬します」とお礼を言って握手してバスに乗った。そして、黄さんに言った。

「日本にはこんな中学校はないよ。勉強になりました。見学出来て良かったです。台湾は2014年から高校も義務教育なんですよ」と、それだけ言って自席へ座った。皆

さんが揃うと黄さんは喋り出した。

「台湾は教育に力を入れています。台湾を守るのは教育しかありませんから。コロナのワクチン、どこも台湾にくれなかったのに、日本だけがくれました。台湾の人たちは泣きました。これからよろしくお願いします。台湾のこの現状がいつまで維持出来るか。これが問題です」

黄さんはこんな真剣な話も忘れなかった。本当に素晴らしいガイドだった。

中学校を出て、祐祥重機械有限公司視察。午後台北市へ移動、故宮博物院、国立台湾博物館見学後、ホテルへ。

### 第3日目（8月22日 土曜日）

高速鉄道（台湾新幹線、台湾では高鉄という）で、台北駅8時51分発、高雄駅着10時30分。1時間半余で、台湾の北から南まで行ける。台湾の人たちが日本のお陰だと喜んでいるのが分かる気がする。

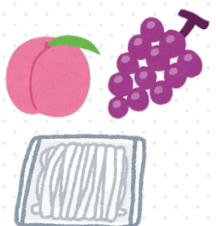
台湾から帰って5日後、8月29日（土）午後8時7分からのNHK番組、新プロジェクトX「新幹線の初海外輸出、前代未聞の2倍速工事、台湾でぶつかる価値観、常識破りの決断」を見た。台湾へ行って乗って帰って来た直後だっただけに感動した。レールは0.1mmの凹凸で脱線の危険性があるということを初めて知った。台湾へ行って帰って1つ賢くなった。

高雄駅着後、土砂降りの中を蓮池潭観光。晴れた日に来ればどれ程美しいだろうかと想像して残念に思いつつ傘をさしていても濡れながらの観光だった。

その後、高雄市前金国民小学校を訪ねた。高瀬高校で私より2年先輩の真鍋秀雄さんが、昭和19年に入学して学んだ学校である。1953年再構築されたとのことだった。その後、中山・三越デパートへ行った。地下2階を見学した。日本の桃（山形産）、ぶどう（山梨産）、香川のさぬきうどんもあったが、北海道産さぬきうどんが沢山あって驚いた。

### 第4日目（8月23日 日曜日）

前日も一日中土砂降り。今日も朝から土砂降り。恒春半島は台湾の最南端で熱帯なの



に少し寒い。これじゃ25度ないかもしれない。上着を持って来るべきだったと後悔した。とにかく寒い。上着を持っていない人は、12人中2人だけだった。



台湾の最南端・恒春半島の西側の先端が猫鼻頭岬、東側の先端が鵝鑾鼻岬で、  
ここが台湾の最南端である。東西の岬を地図で測ると約30kmだった。この30kmの海岸に、10万人を超える日本兵の死体が漂着したという。バシー海峡は台湾とフィリピンの間に横たわる南シナ海の海峡である。フィリピンのルソン島の北端から台湾の最南端まで地図で測れば約200kmである。輸送船の墓場と言われたバシー海峡で、激戦地のフィリピンへ送る日本兵を満載した輸送船がアメリカの潜水艦の餌食となった。遺体が流れ着いたのが台湾の2つの岬に囲まれた海岸だったのだ。何割かがフィリピンへ上陸出来ればと、大本営は人間の命を駒としか考えていなかったということであろう。

この旅行の一番の目的であった猫鼻頭岬にある潮音寺に着いた。白亜の2階建ての建物だ。日本人には、寺院というイメージからは程遠い。本堂は2階にある。正面に阿弥陀如来が安置され、その前・中央に中嶋秀次さんの遺影が安置されていた。中嶋さんは、自身の乗る輸送船がバシー海峡で撃沈され、実に12日間にも及ぶ漂流の末に奇跡的に助かった方である。そして、戦後の人生を仲間の慰霊のために捧げた。中嶋さんの意を知り、賛同して下さる台湾の人達の協力を得て、長年の願いが叶い、潮音寺の落慶法要が営まれたのは、1981（昭和56）年8月のことである。

同行の小野隆さんは、阿弥陀如来と中嶋さんの遺影の前の座布団に正座して仏説摩訶般若波羅蜜多心経を唱え始めた。「凄い！」と感心して、私もその場に立ったまま彼に合わせて唱えたのだった。

戦友らみな　バシーの海に　沈みたり　われのみ何故に　いまを漂う

中嶋さんはこんな歌を残している。（慟哭の海峡　94頁）

潮音寺から海岸まで500m、バシー海峡の海が見えると「慟哭の海峡」に書かれているが、豪雨で余り遠くは見え、私は残念ながら潮音寺からバシー海峡の海は見るこ

とが出来なかった。

潮音寺を後にして、バスはどれ程走ったか分からない。灯台が見える所で停車した。豪雨のためか、誰も下車しようとしない。ここが東側の岬・台湾の最南端の鵝鑾鼻岬だと判断して私は一番に一人だけ下車した。続いて何人かが下車して来たように思う。黄さんが前を指さして、「あれは珊瑚礁の岩です」と言われる。その岩の所まで数十m歩いて行くと、遥か下に海岸線が見えた。「これがバシー海峡だ」と目に焼き付けた。台湾の最南端に立って、俺はバシー海峡を見たんだという満足感があった。雨でなければという思いはあったが・・・。

3日目、4日目の2日間、私たちに同行して説明やら19年間の体験をお話ししてくださった栃木県出身の館量子さん<sup>たちかずこ</sup>にはお世話になった。大学を卒業して19年間台湾の南端恒春で働きながら、日本人の遺骨を探し続けて来られたという。この活動を始めたきっかけは、大学の先生の影響だと言われる。私はおこがましくも、「香川県の三豊市へ来て、我が母校や市民の皆さんに講演をして頂けないでしょうか」とお願いした。別れる時、「私のお願いを忘れないでよ」と念を押した。そして最後に訊いた。「台湾へ来て5日間ずうっと豪雨・土砂降りです。私は経験したことのない雨にびっくりしています。台湾ではよくあるのでしょうか」



「こんなに雨が続くのは珍しいです」と断言された。

「それじゃ、今回の旅行団12名、全員が雨男、雨女ということですね。2日間豪雨の中、ありがとうございました」お礼を述べてお別れした。

5日間の旅、最大の思い出を最後に強いて言えば、5日間の豪雨になるだろう。バスで通り過ぎたいくつもの大きな河はにごり水で満杯。海水は土色。台湾で青い海は見なかった。それ程に雨が降っても、陸地に被害の出た話は聞かなかった。長年の経験から豪雨に耐える国土を構築してきたのだと、私には思えたのだった。

最後に、この旅行を立案し、私を誘って頂いた稲田覚さんに、深甚なる謝意を述べて結びとしたい。

(令和8年9月1日)